

若者の「関係性のなかでの自立」の促進要因と 抑制要因の検討

—デンマークと日本との比較を通して—

川崎 末美^{*1}・吉野 舞起子^{*2}

A Study on Promotional and Suppression Factors of the Independence in Interpersonal Relationships among Young People —Comparison between Denmark and Japan—

KAWASAKI Suemi · YOSHINO Makiko

Independence in interpersonal relationships, which means maintaining person-to-person interaction without being suppressed by others or locking oneself in a shell, is one of the most important tasks in human development for Japanese young people. This issue is closely related to self-esteem and communication skills. However, various research and studies have indicated that these levels are low in Japanese youth.

The aim of this study is to discover what kind of child-raising environment is needed to develop the independence in interpersonal relationships among young people.

The method of the study is comparative research. The researchers looked for differences in the child-raising environment of families and society between Japanese and Danish young people who seem to have obtained a level of independence in interpersonal relationships. In the first phase, researchers conducted questionnaires in Japan (high school and college students in Sapporo City) and Denmark (high school and vocational school students in Helsingør) from October 2008 to February 2009. The researchers received 294 answers from Sapporo, and 305 from Helsingør. In the second phase, face-to-face interview sessions were conducted with five fathers and four mothers in August 2014, August 2015, and September 2016 in Helsingør, Denmark.

The findings of the study can be summarized in three points. (1) Young Danish people attain a relatively high level of independence in interpersonal relationships. (2) Promotional factors of independence in interpersonal relationships are as follows. Danish adults, such as parents and teachers, respect children's thoughts and ideas from early childhood. Danish family members respect family interaction, conversation, and integration based upon their own values and work-life balance. Danish society provides social devices for young people to grow into adulthood in a short time. (3) Suppression factors of independence in interpersonal relationships in Japan are human values of emphasizing

*¹ 東洋英和女学院大学 人間科学部 教授

Professor, Faculty of Human Sciences, Toyo Eiwa University

*² 早稲田大学大学院 国際コミュニケーション研究科 非常勤講師

Part-time Lecturer, Graduate School of International Culture and Communication Studies, Waseda University

academic skills and social hierarchy.

As a result, in order to improve the independence of young people in interpersonal relationships, social and cultural structures are crucial as well as parents' child rearing attitudes. This research concluded that in order to raise young people in a healthy manner in Japanese society, it is necessary to change the current situation at the political, educational, and business organization levels.

キーワード：若者、関係性のなかでの自立、自尊感情、コミュニケーションスキル、生育環境

Keywords：Young People, Independence in Interpersonal Relationships, Self-esteem, Communication Skills, Child raising Environment

はじめに

日本の子どもたちの自己肯定感や自尊感情が諸外国に比べて著しく低いことは早くから指摘されてきた（総理府青少年対策本部 1981）。2005年、文部科学大臣は次代を担う自立した青少年の育成に向けて、中央教育審議会に「青少年の意欲を高め、心と体の相伴った成長を促す方策」を諮問し、その答申が2007年に出された。しかし、内閣府が2013年に行った「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」でも、「私は、自分自身に満足している」「自分に長所があると感じている」という者の割合は調査対象の7か国のなかで日本が群を抜いて低い⁽¹⁾。

時系列的には前に戻るが、2007年の国連・ユニセフの調査では、孤独と感じる子どもの割合が先進国のなかで突出して高い⁽²⁾。また、総務庁青少年対策本部が1998年に実施した第6回世界青年意識調査の結果も、人と気軽に接することが苦手な日本の青年の姿を示している。その結果ではあるが、異性の友人をもつ者の割合も10か国中8位で54.0%にすぎなかった⁽³⁾。2015年の出生動向基本調査（厚生労働省社会保障人口問題研究所）によれば、25歳から34歳の独身者が結婚していない理由のトップは「適当な相手にめぐり合わない」ことであった（男性45.3%、女性51.2%）。その背景の一つは交際相手をもたない未婚者が多いことである（18～34歳の男性69.8%、女性59.1%）。こうした社会現象の根本には日本の若者の自尊感情やコミュニケーションスキルの低さがあると考えられるが、これが日本の出生率の低さにもつながっている。

デンマークでは、女性が職場に進出した1960年代から1970年代にかけて出生率が減少したものの1980年代以降は出生率が回復している。筆者の川崎は、デンマークの出生率回復の理由探るために、1999年と2000年の夏にデンマークで社会調査を行ったが⁽⁴⁾、その時に出会った若者たちの振る舞いには目を見張った。高校でグループインタビューをした時も、授業を見学した時も、生徒たちは人の話にじっ

と耳を傾け、質問に対して臆することなく自分の考えをはっきり述べていた。授業を見学した際に、与えられた席に着くと隣席の女子生徒がにっこり微笑んで「どうぞ」と教科書を差し出してくれた。見学を終えて校舎の出口を探していると、どうしたのかと男子生徒が問いかけてくる。適切なコミュニケーションをとることができ、他者への配慮も忘れないスマートな若者たちであった（川崎末美 2001）。

畠中宗一は、「関係性を生きる」という概念を提示し、これを次のように説明している。「人間として、他者に誠実な関心をもつ。他者も同様な関心を持つ。このような振る舞い方が、同時に、そして相互性のなかで展開されるとき、関係性を生きていると言える」と（畠中宗一 2009）。デンマークで筆者が出会った生徒たちは、まさに畠中が言う関係性を生きているように思われる。

畠中は、人と人との相互関係をさらに掘り下げ、人が「対人関係において他者にのみ込まれることなく、また、自己に固執し閉じこめることもなく、人と人との相互作用のなかに関係性を存在させることができる」ことの必要性を指摘し、このような状態を『関係性のなかでの自立』と名付けている（畠中 2009）。

日本に多く見られる孤独な子どもたち、また、自己を肯定できず自分に自信がもてない子どもたちは、他者との関係のなかで素直に自己開示することが難しく、他者に誠実な関心をもつことも少なく、「関係性を生きている」という実感をもつことができていないのではないだろうか。

対人関係の基盤は幼い頃からの人との関係性のなかで形成される（木村直子 2009）。また、人は他者から愛され受容されることで自尊感情や自己肯定感を高める。その他者として最も重要な存在は、子どもにとっては生まれて最初に出会う母親であり父親である。その親たちに安心して喜怒哀楽を表現でき、家庭が温かい居場所になっていることが子どもの自尊感情を高め（KANIE Noriko, IWASAKI Kaori, MAKINO

Katsuko 2009)、「関係性を生きる力」を育み、『関係性のなかでの自立』を可能にするのかもしれない。

ところで、札幌市南区の郊外に「札幌トモエ幼稚園」がある。この幼稚園にはクラスの枠も仕切られた教室もない。大きなホールのような園舎と周囲の豊かな森のなかで、その日に誰と、何をして遊ぶかを自分で自由に決める。けんかをしても先生は介入しない。仲直りは子どもたちに任されている。森の中では昆虫や蛇にも触れ、遊びながら生き物について学ぶ。土手をよじ登り、崖をすべり降り、高い木と木の間に渡された太いロープのブランコで空中を舞う。冒険心を満たしながら、心身を鍛えている。まるでデンマークの「森の幼稚園」のような光景が展開されている(湯沢雅彦 2001)。この幼稚園のもう一つの特徴は、母親も毎日登園することである。未就園の乳幼児たちも母親に連れられて来る。時には父親や祖父母も来る。そして子どもたちと一緒に遊んだり、親同士がおしゃべりをしたり、自分たちでイベントを企画して楽しんだりもする。これは、木村仁園長の、「母親が楽しく過ごしていれば子どもも幸せになれる」「子育てにはコミュニティが必要」という持論に基づくもので、こどもたちはさまざまな人間関係を経験し、親たちも共に育ち合う。また、月に2回、土曜日に父親の日がある。父親たちは子どもたちや幼稚園のスタッフと関わるなかで子育てを楽しむようになり、父母が共同で子育てを行う家庭がつけられている(木村仁 2001, 2003, 宮武大和 2008)。

同じ日本にあっても札幌トモエ幼稚園にみられるような子育て環境、すなわち、子どもの自発性や主体性が尊重され、危険とも思われるような自然との豊かな関わりのなかで遊びが促され、父母共同の子育てが実践されている環境で育った若者は、そうではない若者に比べて『関係性のなかでの自立』が進むのだろうか。

筆者の川崎は、畠中宗一を研究代表とする共同研究「情緒的自立に関する総合的研究」(2007年度～2011年度科学研究費補助金基盤研究(B)

課題番号 19300243)に参加する機会を与えられ、「関係性のなかでの自立尺度」の開発に加わった(木村直子ほか 2008)。本研究ではこの尺度を用いて調査対象者たちの『関係性のなかでの自立』の達成度を測定し、それと親の養育態度や家庭の雰囲気、調査対象者が所属する社会の環境や対象者の基本的属性などとの関係を分析することによって、どのような生育環境が『関係性のなかでの自立』を育むのかを検討した。

調査対象は、デンマークではエルシノア市に居住する若者、日本では札幌トモエ幼稚園卒の若者、札幌市の一般の若者である。

1. 研究方法

1.1 調査の概要

(1) アンケート調査

日本では、2008年10月から2009年2月に札幌トモエ幼稚園の卒園生および札幌市の一般の高校生・大学生を対象に、デンマークでは2009年1月から2月にかけてエルシノア市の普通高校の生徒および専門学校の学生を対象に実施した⁽⁵⁾。

札幌市の一般の高校生171名と大学生41名、および、エルシノア市の高校生250名、専門学校の学生60名に対しては、協力を得た教員の担当授業のなかで実施した。調査は無記名、回答は任意としたが、結果的に全数を回収できた。ただ、エルシノア市の調査では5票の回答不備があり、有効票は305(有効回収率98.4%)であった。札幌トモエ幼稚園の卒園生については住所がわかっている159名に調査票を郵送したが、郵送調査であったため、有効回収票は82(有効回収率52%)にとどまった。

以下の記述では、エルシノア市の回答者集団を「デンマーク」、札幌トモエ幼稚園の卒園者の集団を「札幌トモエ」、札幌の他の回答者集団を「札幌一般」、両集団を合わせてデンマークと対比して述べる場合は「日本」とする⁽⁶⁾。

アンケート調査の対象者の基本的属性は表1に示した通りである。性別構成は、札幌トモエ

若者の「関係性のなかでの自立」の促進要因と抑制要因の検討—デンマークと日本との比較を通して—

は男子の方が少し多いが、札幌トモエと札幌一般を合わせると男子が48%、女子が52%であり、デンマークとほとんど差がない。平均年齢は札幌トモエが一番高いが、札幌トモエと札幌一般を合わせると18.03歳で、デンマーク

の18.24歳との差は小さくなる。きょうだいの平均数も、札幌トモエと札幌一般を合わせると2.24人、デンマーク2.32人とその差は小さくなる。

表1 対象者の基本的属性

属性	集団	男子	女子
性別	札幌一般 (n=212)	96 (45%)	116 (55%)
	札幌トモエ (n=82)	46 (56%)	36 (44%)
	デンマーク (n=305)	141 (46%)	164 (54%)
属性	グループ	平均値	標準偏差
年齢	札幌一般 (n=212)	17.77	1.21
	札幌トモエ (n=82)	18.71	2.11
	デンマーク (n=305)	18.24	1.38
きょうだいの数	札幌一般 (n=212)	2.22	.618
	札幌トモエ (n=82)	2.29	.657
	デンマーク (n=305)	2.32	.659

(2) 聞き取り調査

デンマークの親の養育態度に関するアンケート調査の結果について、日本人の一般的な考え方では理解できない部分もあったので、エルシノア市の親たちを対象に半構造化インタビューを2014年と2015年の8月に行った⁽⁷⁾。2014年は父親7名と母親5名（夫婦2組を含む）、2015年は父親5名と母親2名（夫婦2組を含む）、それぞれの家や職場で、1時間から3時間をかけて個別で、夫婦の同席で、あるいはまた夫婦に子どもたちも同席してインタビューを行った。夫婦2組と父親1名には2014年と2015年の両年にわたって協力を得た。

さらに2016年はきょうだい関係に限定した調査を、1～2時間の個別面接の聞き取りで父親2名と母親3名に、自記式のアンケート調査を父親1名、母親3名に対して行っている。このうち聞き取り調査の父親1名は2015年に、自記式アンケートの父親1名と母親1名は2014年と2015年に、それぞれ協力を得ている。

以上の聞き取り調査への協力者の実人数は父

親10名、母親10名である。年齢階層は38歳の父親、68歳の父親各1人の他は、40歳代と50歳代が半々である。経済階層は中程度。母親は全員が有職で、教師3人、他は企業勤務のホワイトカラー、父親の職業は教師2人、NGO勤務1人、公務員1人、企業勤務6人、調理師1人である⁽⁸⁾。

1.3 分析に用いた変数

(1) 独立変数

- ① 調査対象の各集団：「札幌トモエ」「札幌一般」「デンマーク」の3集団、および前二者を統合した「日本」と「デンマーク」の2集団である。
- ② 基本的属性：年齢、性、きょうだい数の3つである。
- ③ 親の養育態度：「受容」「指導」「厳格」「勉強重視」の4側面を父母別に捉えた⁽⁹⁾。
- ④ 家族の雰囲気：小さい頃の遊びや思い出の共有、親子の会話の楽しさを内容とする「温かい父子関係」「温かい母子関係」⁽¹⁰⁾、

家族の協同や家族と共にいることの安心感を内容とした「家族の統合」⁽¹¹⁾の度合いを測定した。

③④のレベルを測定する質問への回答は「そのとおりだ」「どちらかといえばそうだ」「どちらかといえばそうではない」「そうではない」の4件法で求め、肯定する回答から順に4,3,2,1点を与えた。

(2) 従属変数

従属変数は『関係性のなかでの自立』の達成度である。前述した畠中宗一を代表とする科研の研究のなかで開発された、18の質問から成

る尺度を用いた。各質問の選択肢は「非常によくあてはまる」から「全くあてはまらない」までの6件法とし、その回答に、「関係性のなかでの自立」への寄与が大きい方から順に6～1点を与えた。ただ、デンマーク調査では18項目のうち「人は他人と親しくなりすぎないほうが幸せであろう」ということが理解しにくかったのか、無回答が31%もあったので、この項目を除外した17項目で測定した。

17項目の回答について因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行うと3因子が抽出された（表2）。

表2 対象者の基本的属性

	因子		
	F1	F2	F3
	ほどよい関係性を生きる	自信をもって自分らしさを生きる	前向きに生きる
13. 他人との間に壁を作っている (*)	.709	.200	-.219
5. あまり人と親密な関係になりたいとは思わない (*)	.693	.069	-.108
2. 人間関係を煩わしく思う (*)	.671	.131	-.145
14. 誰も私をわかってくれないと、私は感じている (*)	.580	.369	-.243
9. 私の社会的なつながりは、うわべだけのものである (*)	.569	.225	-.342
10. 人から見捨てられるのではないかと心配になることがある (*)	.202	.651	-.133
11. 私は感情的に周りの人からの影響を受けやすい (*)	-.172	.650	.021
3. 人の目ばかり気にして、自分を失いそうになることがある (*)	.313	.584	-.139
16. 失敗すると二度と立ち直れないような気がする (*)	.272	.553	-.205
15. 周りの意見や環境によってすぐに影響され、変化してしまう (*)	.133	.537	-.166
6. なにか良くないことがあると、すぐに自分のせいだと考えてしまう (*)	.257	.530	-.088
18. 張り合いがあり、やる気が出ている	-.304	-.129	.674
8. いろいろな良い素質をもっている	-.234	-.168	.661
12. 私は、自分なりの生き方を主体的に選んでいる	-.067	-.215	.606
17. 自分に対して肯定的である	-.301	-.253	.542
7. 社会の中での自分の生きがいが増えてきた	.010	.025	.512
1. 前向きの姿勢で物事に取り組んでいる	-.219	-.067	.477
因子寄与	2.708	2.472	2.414
因子間相関	ほどよい関係性を生きる	自信をもって自分らしく生きる	前向きに生きる
	1.000	.466	.489
		1.000	.358
			1.000
信頼性係数 17項目全体尺度 $\alpha = .869$	$\alpha = .830$	$\alpha = .787$	$\alpha = .771$

因子抽出法：主因子法、回転法：Kaiserの正規化を伴うバリマックス法

(*) 逆転項目

若者の「関係性のなかでの自立」の促進要因と抑制要因の検討—デンマークと日本との比較を通して—

第1因子と第3因子は前述の尺度開発の研究のなかで行った因子分析の結果と同じであったので、それに倣って「ほどよい関係性を生きる」「前向きに生きる」とした。第2因子は、同研究の「自信をもって生きる」と「自分らしさを生きる」の2つの因子を合わせたものになっていた。これは共同研究者の野原留美と畠中宗一の調査研究(2009)の中で行った因子分析の結果と同じであったのでこれを踏襲し、この因子を「自信をもって自分らしく生きる」と名付けた。なお、各因子の信頼性係数は、第1因子から順に.830/.787/.771、全17項目では.869であり、尺度の信頼性はほぼ確認された。

なお、各因子の内容は表2のとおりであるが、「ほどよい関係性を生きる」は他者との距離の取り方や他者への信頼に関わるもの、「自信をもって自分らしく生きる」は自分の存在感や能力への自信に関わるもの、「前向きに生きる」は主体性や自尊感情・自己肯定感に関わるもの

である。

以下では、以上の3つの因子をそれぞれ「ほどよい関係性」「自信と自分らしさ」「前向き」と略記する。

2. 分析結果

2.1 『関係性のなかでの自立』の達成度

表3に示した通り、『関係性のなかでの自立』の達成度は、尺度全体で見ても、因子別にみても、集団別平均得点はデンマークが一番高く、札幌一般が一番低い。札幌トモエはその中間にある。デンマークの若者の『関係性のなかでの自立』の達成度の高さが確認されたことになる。

「他者とほどよい関係をもちつつ前向きに生きているが、そこには高い自尊感情とともに他者への信頼がある」、そんな若者がデンマークには多いということである。しかし、札幌トモエ幼稚園の卒園者も「自信と自分らしさ」はデンマークに近い。

表3 『関係性のなかでの自立』の達成度得点の集団別比較

	因子名	集団	度数	平均値	標準偏差	札幌一般とトモエの平均値の差 (I-J)	札幌トモエとデンマークの平均値の差 (I-J)
みた比較 尺度全体で	関係性のなかでの自立	札幌一般	202	3.72	0.60	.416***	.484***
		札幌トモエ	80	4.13	0.76		
		デンマーク	257	4.62	0.62		
因子別にみた比較	ほどよい関係性を生きる	札幌一般	208	3.91	0.97	.407**	.766***
		札幌トモエ	80	4.32	0.89		
		デンマーク	279	5.09	0.80		
	自信をもって自分らしさを生きる	札幌一般	206	3.48	0.91	.504***	.157
		札幌トモエ	82	3.98	0.97		
		デンマーク	274	4.14	0.94		
	前向きに生きる	札幌一般	205	3.78	0.74	.352**	.591***
		札幌トモエ	80	4.13	0.86		
		デンマーク	282	4.72	0.71		

***p<.001 **p<.01 *p<.05

2.2 親の養育態度と家庭の雰囲気

親の養育態度と家庭の雰囲気について、各下位項目の平均得点を表4に示した。得点は1点から4点の間に分布し、数値が高いほどその傾向が大きいことを示している。

親の養育態度のうち、「受容」は父母ともデンマークが高く、札幌トモエがそれに次ぎ、札

幌一般が一番低い。「指導」と「厳格」は、札幌トモエと札幌一般は同程度で、デンマークよりかなり高い。「勉強重視」はデンマークの方が高く、札幌一般とトモエがともに低い。

家庭の雰囲気は、「温かい父子関係」と「温かい母子関係」、「家族の統合」の3項目とも、デンマークと札幌トモエが高く、札幌一般が低い。

表4 親の養育態度・親子関係の良否・家族の統合度に関する得点比較

親の養育態度と家庭の雰囲気		集団	度数	平均値	標準偏差	札幌一般とトモエの平均値の差 (I-J)	札幌トモエとデンマークの平均値の差 (I-J)
父親の養育態度	受容	札幌一般	187	2.74	.69	.442***	.112
		札幌トモエ	80	3.19	.68		
		デンマーク	269	3.30	.64		
	指導	札幌一般	190	3.26	.87	.010	.704***
		札幌トモエ	79	3.25	.91		
		デンマーク	275	2.55	.94		
	厳格	札幌一般	189	3.20	.87	.039	.933***
		札幌トモエ	80	3.16	.82		
		デンマーク	279	2.23	1.06		
	勉強重視	札幌一般	188	2.13	.86	.111	.550***
		札幌トモエ	79	2.23	.92		
		デンマーク	275	2.78	1.01		
母親の養育態度	受容	札幌一般	207	3.10	.66	.241**	.217*
		札幌トモエ	79	3.34	.56		
		デンマーク	286	3.56	.55		
	指導	札幌一般	208	3.42	.72	.109	.850***
		札幌トモエ	79	3.53	.69		
		デンマーク	292	2.68	.94		
	厳格	札幌一般	208	3.28	.77	.016	.940***
		札幌トモエ	80	3.26	.78		
		デンマーク	295	2.32	1.01		
	勉強重視	札幌一般	208	2.41	.92	.184	.761***
		札幌トモエ	80	2.23	.93		
		デンマーク	292	2.99	.90		
家族の雰囲気	温かい父子関係	札幌一般	188	2.73	.85	.321**	.007
		札幌トモエ	80	3.05	.72		
		デンマーク	278	3.04	.68		
	温かい母子関係	札幌一般	207	2.94	.80	.355***	.115
		札幌トモエ	79	3.29	.59		
		デンマーク	286	3.18	.65		
	家族の統合	札幌一般	210	2.91	.67	.206*	.149
		札幌トモエ	82	3.11	.63		
		デンマーク	289	3.26	.56		

***p<.001 **p<.01 *p<.05

若者の「関係性のなかでの自立」の促進要因と抑制要因の検討—デンマークと日本との比較を通して—

以上の結果から見えてくるデンマークの家庭像は、「父母とも子どもに受容的な態度で接し、指導や厳格なしつけはあまり行わない。勉強重視の傾向はあるが、会員間の話し合いや協力も多く、家庭の雰囲気は明るく温かい」というところである。札幌トモエも親の受容的態度や家庭の雰囲気はデンマークに近い。しかし、指導や厳格なしつけの傾向が強いことと勉強重視の傾向が弱いことは札幌一般と同じであり、ここには日本とデンマークの違いがよく表れている。

2.3 『関係性のなかでの自立』の促進要因と抑制要因

『関係性のなかでの自立』とその3因子それぞれを従属変数とした重回帰分析を次の(a)(b)(c)の3通り実施した(表5)。(a)は札幌の2集団とデンマークを合わせた調査対象者全体の分析、(b)札幌の2集団を合わせた日本のみの分析、(c)はデンマークのみの分析である。これら3通りの分析を行ったのは、デンマークと日本では社会的文化的環境が大きく異なるので、国別に分析して両国の傾向の違いを捉える必要があるからである。

(1) 促進要因

『関係性のなかでの自立』への影響力の強い順に述べていく。

① 集団：デンマーク社会の特性と札幌トモエ幼稚園の教育方法

対象者全体の分析にみられるように、『関係性のなかでの自立』に対しても、また、3因子それぞれに対しても、「デンマーク」が最も大きな促進要因になっている。これは、個人が尊重され自己決定が大切にされるデンマークの文化や教育が若者の『関係性のなかでの自立』の発達に大きく影響していることを推察させる。

日本のみの分析では、「札幌トモエ」が「自信と自分らしさ」を促進し、それが『関係性のなかでの自立』を高めていることがわかる。これは、個人の自発性や自己決定、また、自然環

境とのふれあいのなかで冒険心を満たすような札幌トモエ幼稚園の教育方式が、自分を信頼し自分らしく生きる力を高めていることを示唆している。

② 個人的属性：年齢が高いこと（日本）

対象者全体の分析では、「年齢」が高いことが『関係性のなかでの自立』と3因子すべてに対して促進要因になっている。しかし、この傾向はデンマークのみの分析では見られず、日本のみの分析でこの傾向がより強く表れている。これは日本の特徴と言えそうである。「ほどよい関係性」因子を特に促進しているが、これは日本の若者たちが、社会経験を積む期間が長いほど他者とほどよい関係性を取り結ぶことができるようになることを示している。

③ 家庭の雰囲気：家族の統合度が高いこと（両国）と温かい父子関係（デンマーク）

対象者全体の分析では、家族がよく統合されていることが、「ほどよい関係性」と「自信と自分らしさ」を促進し、それが『関係性のなかでの自立』を高めていることがわかる。その傾向は日本のみの分析でも同じである。デンマークのみの分析ではその関係は見られないが、これは、デンマークの対象者の大多数の家庭で統合度が高いためであると考えられる。

また、デンマークのみの分析では、子どもの頃に父親と一緒に遊んだことや子どもの頃の思い出を父親が語ってくれるような温かい父子関係があることが、「ほどよい関係性」を促進している。

④ 親の養育態度：母親の受容（両国）と父親の指導（日本）

対象者全体の分析では、母親の受容が「前向き」の促進要因になっている。日本のみの分析ではその関係はさらに強い。デンマークのみの分析ではその関係は見られない。これも、デンマークではほとんどの母親が受容的であるからであろう。

日本のみの分析では、父親の指導が「ほどよい関係性」を促進している。

表5 『関係性のなかでの自立』および3因子の規定要因を探る重回帰分析の結果

		関係性のなかでの自立	ほどこい関係性を生きる	自信をもって自分らしさを生きる	前向きに生きる
		標準偏回帰係数 (β)			
(a) 対象者全体	集団/日本・デンマーク	.409***	.417***	.212**	.390***
	回答者の年齢	.143***	.118**	.107*	.089*
	性別	-.055	.024	-.081	-.080*
	きょうだいの数	-.047	-.090*	-.079	.017
	父・受容	.045	.063	.014	.040
	母・受容	.123*	.057	.032	.197***
	父・指導	.076	.075	.035	.077
	父・厳格	-.091	-.144**	-.040	-.026
	母・指導	-.023	.029	-.021	-0.04
	母・厳格	-.017	-.017	-.025	.018
	父・勉強重視	-.047	-.033	-.087	-.017
	母・勉強重視	-.077	-.094*	-.044	-.013
	温かい父子関係	.040	.066	-.019	.047
	温かい母子関係	-.025	-.104	-.043	.082
	家族の統合	.169**	.159**	.166**	.072
調整済みR ² 乗	.353	.336	.083	0.344	
F値	16.875***	16.422***	3.725***	17.074***	
(b) 日本のみ	集団/札幌一般・札幌トモエ	.199**	0.111	.251***	.061
	回答者の年齢	.223***	.237***	.120	.143*
	性別	-.022	-.017	.042	-.095
	きょうだい構成	-.129*	-.168**	-.127*	-.003
	父・受容	-.081	.083	-.124	-.130
	母・受容	.092	.010	-.096	.298**
	父・指導	.080	.160*	.019	.006
	父・厳格	.055	-.109	.132	.072
	母・指導	.041	.023	.116	-.056
	母・厳格	-.083	-.038	-.129	-.012
	父・勉強重視	-.177**	-.157*	-.161*	-.049
	母・勉強重視	-.152*	-.200**	-.125	-.008
	温かい父子関係	.054	-.061	.053	.132
	温かい母子関係	-.095	-.156	-.122	.076
	家族の統合	.274*	.273**	.197*	.178
調整済みR ² 乗	.225	.196	.118	.218	
F値	5.760***	5.081***	3.248***	5.618***	
(c) デンマークのみ	回答者の年齢	.045	-.017	.031	.041
	性別	-.062	.114	-.144*	-.091
	きょうだい構成	-.025	-.028	-.109	.015
	父・受容	.129	.016	.100	.207
	母・受容	.198	.162	.137	.122
	父・指導	.087	.051	.020	.120
	父・厳格	-.221**	-.202**	-.164*	-.099
	母・指導	-.070	.016	-.092	-.042
	母・厳格	.031	-.020	.042	.046
	父・勉強重視	.018	.018	-.072	.006
	母・勉強重視	.023	.007	.103	.001
	温かい父子関係	.036	.198*	-.074	-.035
	温かい母子関係	-.022	-.112	-.015	.078
	家族の統合	.077	.116	.058	-.023
	調整済みR ² 乗	.112	.110	.053	.070
F値	2.710**	2.821*	1.791*	2.125*	

***p<.001 **p<.01 *p<.05

若者の「関係性のなかでの自立」の促進要因と抑制要因の検討—デンマークと日本との比較を通して—

(2) 抑制要因

① 親の養育態度：勉強重視（日本）、父親の厳格（デンマーク）

日本のみの分析において、母親の勉強重視が「ほどよい関係性」抑制し、また、父親の勉強重視が「ほどよい関係性」と「自信と自分らしさ」を抑制している。そして、それらが『関係性のなかでの自立』のレベルを下げている。デンマークでは日本より親の勉強重視の傾向が強いが、これは『関係性のなかでの自立』の抑制要因にはなっていない。

他方、デンマークのみの分析では、父親が厳格であるほど「ほどよい関係性」と「自信と自分らしさ」を抑制し、『関係性のなかでの自立』のレベルを下げている。

② きょうだいの数：きょうだいの数が多いこと（日本）

対象者全体の分析では、きょうだいの数が多いほど「ほどよい関係性」を少しだが下げている。しかし、この関連はデンマークではほとんど見られないものであり、日本のみの分析で、その傾向が明確に表れている。日本ではきょうだいの数が多い方が「ほどよい関係性」と「自信と自分らしさ」を抑制し、『関係性のなかでの自立』のレベルを下げているということである。

③ 性別：女性であること（デンマーク）

デンマークのみの分析で、女性であることが「自信と自分らしさ」を抑制する傾向にあった。

3. 考察 ～『関係性のなかでの自立』を育むメカニズム

若者の『関係性のなかでの自立』のレベルはデンマークが最も高く、札幌トモエがそれに次いでいた。そして、その主要な規定要因としては、生育環境としての家族・家庭もさることながら、当該社会が大切にしている価値観を反映する人間関係や学校教育のあり方が重みをもっていることが推察された。

本章では、若者の『関係性のなかでの自立』の規定要因として析出された個々の変数につい

て、その影響のメカニズムを、価値観や社会のあり方を念頭に置きつつ考察する。ここでは、エルシノア市で子育て中の親たちに対して行った聞き取り調査のデータも用いる。

3.1 「家族の統合」との関係について

家族の統合度が高いほど『関係性のなかでの自立』の達成度も高いことがわかったが、統合度が高い家族とはどんな家族なのか。家族の統合度の測定に用いた質問項目からこれを描いてみると、「家族が一緒に過ごすことが多く、互いに冗談を言ったりふざけたりすることも多い。家族にとって大事なことについては皆で話し合い、互いに助け合っている。また、誕生日や記念日など家族のイベントは大切にするなど、家族成員が互いに尊重されている」家族の姿が浮かんでくる。幼い頃からこのような家族関係のなかで育つならば、人は信頼に足るものであることを学び、安心して自分を表現し、ほどよい人間関係の結び方を、知らず知らずの間に身に付けていくことであろう。

エルシノア市での聞き取り調査で、子育てにおいて大切にしていることをたずねると、例外なく「子どもと時間を共有し、話をする」という答えが返ってくる。「話をしていなくても家族の存在を感じながらリビングで時を過ごすのが好き」という母親（55歳、企業管理職）もいた。聞き取り調査のためにこの母親の家庭を訪問すると、子どもたちが在宅している場合は家族全員で出迎えてくれた。そして、筆者らがインタビューをしているその場から子どもたちが立ち去ることはなく、一緒に話に加わった⁽¹²⁾。高校生から大学生の子どもたちがそれである。日本では、調査員が家庭を訪れた場合は、大方の家庭では高校生にもなった子どもたちは自室に引き上げるのではないだろうか。また、親たちもそれを促すであろう。デンマークの家庭で行った聞き取り調査の際のこのエピソードは、外国人が来たという珍しさもあったかもしれないが、それだけとは思えないほど、日頃から家族や来客との会話を楽しんでいるという雰

囲気が醸し出されていた。

以上はデンマークの家族の統合度の高さを示す話であるが、エルシノア市の若者を対象にしたアンケート調査でも、家族の統合に関する質問にはそれを強く支持する者が過半数を占め、「どちらかと言えば」も含めると8割から9割の者が肯定的な回答をしている。

デンマークでこのような暮らしが成り立つのは、家庭生活を大切にする価値観とともに、週当たり37時間という短い法定労働時間と残業もほとんどしないという時間的環境があるためでもある。長時間労働の日本ではデンマークのような家族の関わり方は望めない。しかし、そのような日本にあっても統合度の高い家族では、「ほどよい関係性を生き、自信をもって自分らしく生きている」若者に育っている。

3.2 母親の「受容」、父親の「指導」や「厳格」との関係について

本研究における受容的な親とは、「子どもを信頼し、ありのままを認め、よくほめ、子どもの考えや話をよく聞き、悩みや進路についてもよく相談ののってくれる」親である。このような親のもとで育つ子どもが、自己肯定感や自尊感情を高め、前向きに物事に取り組み、主体的に生きるようになるのは自然の流れであると考えられる。対象者全体の重回帰分析でも、また日本では特に母親の受容的態度が「前向きに生きる力」を伸ばしているという結果であった。

礼儀や社会のルールを守ることに厳しい「厳格」な親の態度に注目すると、対象者全体の重回帰分析では、父親の「厳格」な態度が「ほどよい関係性」の抑制要因になっている。これはデンマークのみの分析でその傾向がさらに強く、「自信と自分らしさ」も抑制している。デンマークでの聞き取り調査で一人の父親（43歳、教師）が、「いけないことだとわかっているが厳しく接してしまうことがある」ときまりが悪そうに話していたが、たいていの家庭では親から一方的に意見をしたり叱ったりするのではなく、親子が話し合いを通して行動のルー

ルを決めることが多いようであった。ある父親（55歳、教師）は、一般論として、デンマークでは親が子どもの言いなりなり過ぎることへの反省が始まっていると話してくれた。この見直しは今後のことであり、今のデンマークでは親が受容的であることが普通なので、ルールを一方的に押し付けるような「厳格」なしつけを受けると、子どもは親から抑圧されていると感じるために、「ほどよい関係性」や「自信や自分らしさ」を身に付けることが阻害されるのかもしれない。

他方、札幌のみの重回帰分析では、子どもが悪いことをしたときにはきちんと叱るような父親の「指導」が「ほどよい関係性」の促進要因となっている。デンマークでは前述したように、日常的に親子で話し合いの機会を多くもち、好ましい行動を子どもが理解できるようにしているので叱ることが少なくすむ。聞き取り調査で会った母親（45歳、教師）の家庭では、子どもが悪いことをした時には父親が対応するが、そのやり方は、その場で声を荒げて子どもを叱るのではなく、後で子どもを諭していると話してくれた。

デンマークではまた、子どもが悪いことをしたときに父親がきちんと叱るより、子どもと一緒に遊んだり子どもが小さかった頃の話を話してくれたりするような、温かい父子関係のある家庭の方が、「ほどよい関係性」を育てることに寄与している。

日本では「母親の受容」が子どもを前向きにし、「父親の指導」が人との間にほどよい関係性をもつ子どもに育てているのは、『厳父慈母』を両親の理想像としてきた「家」制度の下での考え方が人々の意識のなかにまだ残っていることを示している。他方、デンマークでは親が子どもの人格を尊重し、話し合いを通して好ましい行動に導く民主的な親子関係が志向されているのである。

3.3 「勉強重視」の養育態度との関係について

アンケート調査では、自分の親が「遊びやす

スポーツより勉強を重視している」とみている若者が、日本よりデンマークに多かった。他方、日本では親の勉強重視が「関係性を生きる力」を育てるのにネガティブに働いているのに、デンマークではそうではない。なぜだろうか。

1970年代から1980年代までの日本では、受験戦争と言われるほど高校受験や大学受験が過酷であった。そのようななかで、教育熱心な母親が「教育ママ」と揶揄され、また、勉強を強いられた子どもが家庭内暴力や非行などの問題行動に至ることも少なくなかった。こうした状況に対する反省もあり、あからさまに勉強を重視する親は減少してきた。文部科学省が2005年に実施した「家庭教育に関する国際比較調査」でも、子どもが学校でよい成績をとることを期待する親の割合は日本が最も低く11.9%、最も高いアメリカは72.7%、中位のスウェーデンが45.9%である（大槻奈巳2010）。これは本研究において「勉強重視」の親がデンマークより少ないのと似ている。

しかし、日本の親は本当に学力を重視していないのだろうか。本田由紀（2008）は、現代の母親たちの子育てには、成績が上がるよう熱心に指導し、生活習慣を厳しくしつける「きっちり」した子育ての要素と、できるだけ外で遊ばせたり、いろいろな体験をさせたりし、子どもの希望もできるだけ聞くような「のびのび」した子育ての要素の両方があると述べている。しかし、重点の置き方は親によって異なり、母親が高学歴の方が両方の要素に力を入れるが、「きっちりした」子育ての要素、特に成績の向上を期待する傾向があるというのである。全体としては成績重視の親は少なくなったとはいえ、本田が指摘しているように、依然として子どもに高い学力偏差値を期待している親はいる。そのような親の期待に応えられない子どもは、自信を失うばかりでなく、不安感や他者への不信感を強め、「自信と自分らしさ」や「ほどよい関係性」を伸ばすことが難しくなるだろう。

一方、デンマークでは国民学校の9年生（日

本では中学3年生、年齢では16歳）まで試験がない。子どもがどこでつまづいているかを確認するためのテストはしばしば行われるが、点数はつけない。点数を付ければ順位がわかり、子どもが劣等感や優越感をもつことになる。それが良くないと考えられているのである。したがって、学力だけで個人の価値が測られ、序列化されることがない。子ども時代はせいっぱい遊び、遊びを通して体力や運動神経、知的好奇心や判断力、社会性など、人間としての基本的な力を身につけることが大切と考えられているのである（伊藤美好2001、川崎末美2001、千葉忠夫2011）。

しかし、このようなデンマークでも子どもが高校生にもなると、親は遊びやスポーツより勉強を重視するようになっていくことがアンケート調査でわかった。それはなぜか。また、それは子どもにとってプレッシャーにはならないのか。これを明らかにすることもエルシノア市の親への聞き取り調査の目的の一つであった。この問いに対するある母親（56歳、教師）の答えは、「自分が希望する仕事に就くために、あるいは、やりがいのある仕事をするためには知識やスキルが必要です。そのことは高校生にもなれば子どももわかっていますから、自発的に勉強します」というものであった。アンケート調査でも、デンマークの親の方が、子どもに自分の生き方や仕事についてよく話をしたり、子どもの進路について相談に乗ったりすることが多い⁽¹³⁾。親子のこうした話し合いも、社会人になるためには勉強が必要なことを子どもが理解することにつながっていると考えられる。

一方、日本では学歴社会への批判として、受験でつめ込まれた知識は社会では役に立たないという考え方が形成されてきた（荻谷剛彦1995）。日本で勉強が軽視される所以がここにありそうだが、実際には、安定的に高収入を得るためには偏差値の高い大学に入り、大企業に就職する方が有利だという現実もある。デンマークのように、社会で仕事をするために知識やスキルが必要だとストレートに言えない日本

の社会状況は、子どもたちを困惑させている。こうした状況も、勉強重視の親の子どもの『関係性のなかでの自立』の達成を阻害していると考えられる。

3.4 「きょうだいの数」との関係について

日本ではきょうだいの数が多い方が「ほどよい関係性」や「自信と自分らしさ」が抑制されている。これは意外な結果であった。一般には、きょうだいの数が多い方が人との付き合い方を学ぶチャンスが多く、人格的にも鍛えられると考えられているので、「ほどよい関係性」や「自信や自分らしさ」のレベルは高いという仮説を立ててきょうだいの数を変数に加えていたのである。

しかし、考えてみれば、学業成績や進学した学校の偏差値で人を序列化してしまう日本では、家族も学校価値に支配された「教育する家族」（広田照幸 1999）と化し、親が自分の子どもたちを学業成績によって評価し序列化することが少なくない。筆者も、それが基で「自信と自分らしさ」を喪失し、悩んでいる学生たちに出会うことがある。

2016年に実施したきょうだい関係についての聞き取り調査で、ある母親（43歳、教師）は「子育てでは子どもの個性や希望を尊重するので、同じ物差しできょうだいを比較することはありません。子どもがちゃんと教育を受けることは望みますが、それは、親の満足のためではなく、子どもが仕事に就くために必要だからです」と話してくれた。きょうだいの能力や学業成績を比較して子どもを順位づけしたり、劣等感や優越感をもたせたりすることはないようである。デンマーク政府は民主主義に基づいてひとり一人を大切にすることを目ざしているが（ケンジ・ステファン・スズキ 2010）、それは家庭においても同じようである。

3.5 「年齢」との関係について

日本では年長であるほど「ほどよい関係性」が促進されている。それほど強い関連ではない

が、「前向き」に対しても年長であることが促進要因になっている。しかし、デンマークでは年齢との間には関係はなかった。これはなぜだろうか。

デンマークは家庭でも幼稚園でも、小学校から始まる学校教育のすべての段階で自由や自己決定、自己主張を尊重されながら育ち、高校在学時の18歳で成人に達する。その前、13歳から15歳の間に堅信礼という、クリスチャンとして、一人の人間として社会に対する責任を自覚する通過儀礼を経験する。また、選挙権だけでなく被選挙権も18歳から与えられ、18歳の市議会議員も現れる。文部省の監督下にある全国団体の「デンマーク青年評議会」（加盟組織70団体、会員60万人）は、「民主主義・責任・尊敬・寛容」を共通理念に掲げて、国政選挙年齢の引き下げ等の政治的要求を掲げた活動や国際交流などを行っている（ケンジ・ステファン・スズキ 2010）。さらに、18歳から60歳までの成人男子には兵役の義務があり、くじ引きで招集される。また、子どもが18歳になれば生徒や学生には返還無用の奨学金が国から支給され、格安の学生寮も提供されるので、親から経済的に自立し、高校を卒業する19歳頃から20歳頃までには家を出る者が多い（錢本隆行 2012）。経済的・生活的自立から兵役まで、18歳はもう大人なのである。

以上のようにデンマークには子どもを早く大人にするさまざまな社会装置がある。したがって、アンケート調査に回答してくれた平均年齢18.24歳のデンマークの若者たちのほとんどが大人としての自覚をもっていると考えられる。

一方、日本では成人年齢に達するのがデンマークより2年遅いというだけでなく、高校生からや大学2年生までの間に、例えば、参政権をもつ国民として選挙や政治活動にどのように関わるかなど、大人になるための教育が行われているわけではない。授業方式も教師と生徒の対話で進められるものではなく、生徒は聞くことが中心で受け身になりがちである。『関係性のなかでの自立』を促すようなイベントや経験

若者の「関係性のなかでの自立」の促進要因と抑制要因の検討—デンマークと日本との比較を通して—

としては、進級・進学、課外活動、入学試験や高校卒業、アルバイトくらいである。子どもたちが大人になるための社会的仕掛けは少なく、大人への歩みは緩慢にならざるを得ない。

以上、本章では個々の独立変数が『関係性のなかでの自立』を促進あるいは抑制するメカニズムを検討したが、どれに対しても当該社会の価値観や社会のありようが絡んでいることがわかった。これは、日本の若者の『関係性のなかでの自立』の達成度を上げるのはそれほど簡単ではないことを示している。

まとめと今後の課題

日本の若者の『関係性のなかでの自立』のレベルを上げるヒントを得るために、日本では札幌市の一般の若者と札幌トモエ幼稚園卒の若者、デンマークのエルシノア市の若者を比較対照し、『関係性のなかでの自立』の達成度とそれぞれの生育環境等との関連を検討した。

この研究を通してわかったことは、①デンマークの若者の方が『関係性のなかでの自立』のレベルがかなり高いこと、札幌トモエ幼稚園卒の「自信と自分らしさ」の因子は高いこと、②『関係性のなかでの自立』の促進要因は、個人の自発性や自己決定を幼児期から認める子育て、家庭生活を大切にす価値観とワーク・ライフ・バランスの生活時間構造のもとで家族の会話や温かいふれあいが行われていること、子どもを早く大人にする社会的装置があること、③日本における「関係性のなかでの自立」の抑制要因として特筆されるのは学力重視の人間観とそれによる人の序列化が行われていることであった。

以上の通り、若者の『関係性のなかでの自立』の達成には、親の養育態度だけでなく当該社会の価値観や社会のありようも関わっており、日本の若者の『関係性のなかでの自立』の力を上げることはそれほど容易ではないことが推察される。しかし、日本の若者が自信をもって自分らしく前向きに生き、他者とほどよい距離感

を維持しつつ、ほどよい関係を取り結ぶ力を高めることは、本人のウェルビーイングのためにも社会の発展のためにも必要なことである。まずは、親として家族のあり方を見直すこと、学力によって人を序列化するような価値観を見直すことなど、個人レベルでできることは早急に進めたいものである。教育機関としては、トモエ幼稚園のように子どもが自信をもって自分らしく生きる力を高める教育を行うことも可能である。こうした個人や家族、教育機関の取り組みを推進するためにも政治や経済活動の各レベルでの現状変更に向けた努力を求めたい。

今後の研究課題は、デンマークで行ったような聞き取り調査による質的研究を日本でも行い、また、日本各地の民間団体や学校で行われている子どもの社会性を育てるさまざまな取り組みを取材し、日本という社会のなかで子どもたちが18歳になる頃までに『関係性のなかでの自立』を達成できているようにするには何が必要であるかを具体的に示すことである。

謝辞

本研究のアンケート調査の実施にご協力下さった札幌トモエ幼稚園教諭の宮武大和さん、デンマーク在住のサダコ・ニールセンさん、アンケート調査を受け入れて下さった学校の教職員の方々、質問に答えて下さった生徒さんや学生さんたちに心からお礼を申し上げます。

聞き取り調査では再びサダコ・ニールセンさんに、また、同じくデンマーク在住のエビハラ・サヤカ・ピーダーセンにもお世話になりました。心より感謝申し上げます。

〈注〉

(1) 調査対象国は、日本、韓国、アメリカ、イギリス、ドイツ、フランス、スウェーデンであった。回答は、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の4択による。『私は自分自身に満足している』については、「そう思う」者が日本では7.5%に過ぎないが、他国では最も低いスウェーデンでも21.3%、最高のアメリカは46.2%であっ

- た。逆に「そう思わない」が日本では22.3%で最も高く、他国は3.1%から9.9%であった。『自分に長所があると感じている』についても、「そう思う」は日本が一番少なく15.2%、他国は26.0%～57.2%、「そうは思わない」は日本が一番高く10.6%、他国は0.7%～5.7%であった。
- (2) 「自分は孤独だ」と答えた子どもの割合は、OECD24か国の平均が7.4%であったのに対し、日本は29.8%であった。
- (3) 友人関係に関する質問のなかで「人との接し方」を5つの質問でたずねている。このうち「知らない人とでもすぐに会話を始める」「話し合いの輪の中に気軽に参加する」「自分とは違った考えをもっている人とうまくやっていく」ことが「いつでもできる」と答えた割合の3項目の合計が、日本は93.1%（平均が31.0%）で10か国中9位であった。ちなみに1位はイギリスで合計234.3%（平均78.1%）である。異性の友人をもつ者の割合はフランスが1位で87.9%である。
- (4) 1999～2000年に東洋英和女学院大学の研究費助成を受けて実施した湯沢雅彦を代表とする共同研究の一環として実施した。
- (5) 札幌市での調査は札幌トモエ幼稚園教諭の宮武大和氏に、エルシノア市での調査はサダコ・ニールセン氏に、それぞれ委託して行った。
- (6) エルシノア市の調査対象者がデンマークを代表するわけではなく、札幌市の調査対象者が日本を代表するわけではない。また、無作為抽出によって得た対象者でもない。しかし、デンマークと日本は社会的文化的枠組みが大きく異なるので、本調査で得たデータをデンマーク、あるいは日本と読み替えることに大きな問題はないと考えている。
- (7) 聞き取り調査は、サダコ・ニールセン氏に調査対象者の紹介を受け、共同執筆者の吉野舞起子と川崎末美が英語で実施した。
- (8) 本研究ではこれらの対象者のうち、語りとして引用したのは5人である。本格的な分析は後の研究で行う予定である。
- (9) 父母の養育態度を子どもの認知で捉えた。9項目の養育態度に対して「そのとおりだ」「どちらかといえばそうだ」「どちらかといえばそうではない」「そうではない」の4件法で回答を求めた。これに対して主因子法による因子分析（バリマックス回転）を行ったところ、3因子に分けられた。

第1因子は、i) 私の考えや話をよくきいてくれる、ii) 私の能力や可能性を認めてくれる、iii) 私のことをよくほめてくれる、iv) ありのままの私を認めてくれる、v) 私のことを信頼してくれている、vi) 私の悩みや進路等についてよく相談にのってくれる、の6項目から成っていたので「受容」とした。内的信頼性を示すCronbachの α 係数は、父親では $\alpha = .887$ 、母親では $\alpha = .895$ と十分な信頼性が確認された。

第2因子は、i) 私が悪いことをしたときはきちんと叱ってくれる、ii) 社会のルールを守ることや礼儀については厳しいほうだ、の2項目から成っていたが α 係数は父母とも低かった（父親 $\alpha = .584$ 、母親 $\alpha = .600$ ）2つを分け、i) を「指導」、ii) を「厳格」とした。

第3因子は、遊びやスポーツより勉強を重視するほうだ、の1項目のみであった。これを「勉強重視」とした。

なお、これらの質問は高校生を想定して作成しているの、既に高校を卒業している対象者には、高校生の頃のことを回想して書いてもらった。

- (10) 温かい父子（母子）関係は、i) 私が小さい頃よく一緒に遊んでくれた、ii) 私の小さい頃のことをよく話してくれる、iii) お母さん（またはお父さんと）話すことは楽しい、の3項目である。これらについても因子分析を行ったが1因子のみで3項目の信頼性係数は、父親では $\alpha = .715$ 、母親では $\alpha = .723$ であった。信頼性は必ずしも十分ではないが、3項目を統合して「温かい父子関係」「温かい母子関係」とした。

- (11) 私の家族は、i) お互いに助け合っている、ii) 家族にとって大事なことは話し合って決めている、iii) 自分たちのことに忙しくすれ違いが多い（逆転）、iv) 誕生日や記念日など家族のイベントを大切にしている、v) 互いに冗談を言ったりふざけたりすることが多い、の5項目が1つの因子として析出された。信頼性係数 α は.766であった。これらを合わせて「家族の統合」とした。

- (12) 調査の性質上、子どもの同席は避けたかったが、一緒にいることがあまりにも自然で当然のことと考えられている感じであったので、離席を促すことができず、また、子どもたちが同席していることで親の発言内容が変わるとは思えないほど率直な話しぶ

若者の「関係性のなかでの自立」の促進要因と抑制要因の検討—デンマークと日本との比較を通して—

りであったので、そのままインタビューを続けた。

- (13) 自分の生き方や仕事についてよく話してくれる父親は、デンマーク 68.3%、札幌一般 50.3%、悩みや進路についてよく相談に乗ってくれる父親は、デンマーク 78.6%、札幌一般 47.6%であった。母親は、いずれについても父親より多いが、ここでは記述を割愛する。

〈引用文献〉

- 伊藤美好 (2001) 『パンケーキの国で—子どもたちと見たデンマーク』平凡社 pp.75-87
- 大槻奈巳 (2010) 「世界の親が子どもに期待すること」牧野カツコ、渡辺秀樹、船橋恵子、中野洋恵編著『国際比較にみる世界の家族と子育て』pp.89-97
- 荻谷剛彦 (1995) 『大衆教育社会のゆくえ』中公新書 pp.105-152
- 川崎末美 (2001) 「子どもは学校のなかでどう育つか」湯沢雍彦編著『少子化をのりこえたデンマーク』朝日新聞社 pp.127-158
- 木村直子、田辺昌吾、野原留美、川村千恵子、北川歳昭、川崎末美、畠中宗一 (2008) 「『関係性のなかでの自立』尺度作成に関する研究」『メンタルヘルスの社会学』日本精神保健社会学会 14号 pp.19-31
- 木村直子 (2009) 「構成概念と尺度作成」畠中宗一編『関係性のなかでの自立—情緒的自立のすすめ』現代のエスプリ No.508 至文堂 pp.27-50
- 木村仁 (2001) 『創造の森の仲間たち』樹心社 pp.159-243
- 木村仁 (2003) 『お母さんが輝く子育てのすすめ』樹心社 pp.11-178
- KANIE Noriko, IWASAKI Kaori, MAKINO Katsuko, (2006) “Effect of Parents’ Academic Background And Child’s Gender on Educational Resources in Family in Relation to Child’s Perception of Family Atmosphere and Self-Esteem.” 『青少年期から成人期への移行についての追跡的研究 JELS 第7集 2003年基礎年次調査報告書』お茶の水女子大学 21世紀 COE プログラム 「誕生から死までの人間発達科学」 pp.87-96
- ケンジ・ステファン・スズキ (2010) 『デンマークが福祉大国になったこれだけの理由』合同出版 pp.185-192
- 銭本隆行 (2012) 『デンマーク流「幸せの国」のつくりかた』明石書店 pp.129-133
- 総理府青少年対策本部 (1981) 「第3章 児童の価値観・生活意識」『国際比較日本の子供と母親：国際児童年記調査最終報告書』大蔵省印刷局 pp.51-92
- 千葉忠夫 (2011) 『格差と貧困のないデンマーク—世界一幸福な国の人づくり』PHP 新書 pp.73-130
- 野原留美・畠中宗一 (2009) 「対人援助職（看護職）のメンタルヘルスと関係性のなかでの自立との関連性に関する研究」日本精神保健社会学会年報『メンタルヘルスの社会学』第15巻 別冊 pp.28-39
- 畠中宗一 (2009) 「関係性のなかでの自立—情緒的自立のすすめ」畠中宗一編『関係性のなかでの自立—情緒的自立のすすめ』現代のエスプリ No.508 至文堂 pp.5-26
- 広田照幸 (1999) 「日本人のしつけは衰退したか」『教育する家族』のゆくえ』講談社現代新書 pp.49-74
- 本田由紀 (2008) 「『家庭教育』の隘路—子育てに強迫される母親たち』勁草書房 pp.163-219
- 宮武大和 (2008) 「親参加の幼稚園」塩野谷斉・木村歩美『子どもの育ちと環境』ひとなる書房 pp.107-130
- 湯沢雍彦 (2001) 「子どもをめぐる風景」湯沢雍彦編著『少子化をのりこえたデンマーク』朝日新聞社 pp.159-175

〈付記〉

本研究におけるアンケート調査とそれに基づく量的分析については、平成19年度～平成22年度科学研究費補助金基盤研究(B)『情緒的自立に関する総合的研究』課題番号19300243(研究代表者 畠中宗一)の一環として実施したものである。